

# 意見書

## (J-ADNI問題について)

平成27年11月2日

公益財団法人脳血管研究所

教授 杉下 守弘



### 1 これまでの経過

J-ADNI研究における問題については、厚生労働省から東京大学に対する5項目の再調査指示をふまえて第三者委員会（J-ADNI研究に関する第三者調査委員会）が設置され、平成26年12月19日付け調査報告書が取りまとめられた。しかし、その判断は全くの誤りであり、日本の科学研究に対する国際的な信頼確保の点からとうてい看過できないため、私は平成27年1月14日付け反論意見書を公表した。

これに対し、第三者委員会の3月23日付け「反論意見書に対する見解」が送付された。しかし、その内容を検討しても、第三者委員会の判断が相当とはとうてい認められず、私の反論意見書への反論になっていないことから、4月1日付けで5点に内容を絞った再反論の意見書（以下「4月意見書」という）を公表した。

その後、第三者委員会も関係各省庁も私の再反論意見書を無視していたことから、もはや反論をなしえないものと認め、適切な是正の対応を直ちに行うことを7月13日付け意見書（以下「7月意見書」という）として公表した。

そうしたところ、8月19日付け第三者委員会の「反論意見書に対する見解（2）」（以下「本件見解」という）が送付された。

### 2 本件見解の問題性

(1) 本件見解は、私が4月意見書で指摘した点、すなわち、①データ改ざんがあったこと、②プロトコル違反と被験者組み入れの問題があったこと、③心理コアPIである私の権限と責任についての見解が誤りであること、④現状のデータベース公開をしてはならないこと、⑤補充意見として、厚生労働省の東京大学に対する調査指示項目が適切に調査、報告されていない問題があることについて、すべて問題がないとする。

(2) しかし、上記①ないし④について、本件見解は、すべて平成26年12月19日付け調査報告書や反論見解のとおりと結論を繰り返すのみである。そのような各文書の判断が誤りであるからこそ具体的な反論を行い、J-ADNI問題について告発してきたことを真実として適切な是正の対応が求められていることを述べているのである。本件見解はそれに何ら実質的な反論をせずに結論を繰り返す対応に終始した。もはや、第三者委員会には、私が科学者として日本の臨床研究の将来を憂慮して指摘してきた問題に対して的確な判断をすることはできないと理解せざるを得ない。

(3) なお本件見解では、上記⑤（調査指示事項の不調査）についてのみ多少の説明がなされている。厚労省からのデータ保全要請後に固定済み被験者に関するクリーニングメモが多数回更新されたという事態が問題であるところ、本件見解では、上記クリーニングメモは調査指示の対象ではないことや、保全要請後に固定済データの修正などは1件もなかったとする。

しかし、保全要請後に多数のデータ更新があったということは、極めて重要な事態であって、これが調査指示事項ではないとすることは許されない。また、この事態については、複数の関係者が第三者委員会に具体的な情報を提供して調査を求めていたのであり、調査対象は十分に分かっていたはずである。本件見解は、調査すべき事項をあえて「固定済み被験者のデータ」と限定し、関係者の要求する内容を調査せずに問題がなかったとするものである。この点でも本件見解は全く認められるものではない。

### 3 心理コア責任者としての私の責任に対して

本件見解では、主任研究者とともに私にもJ-ADNI 1研究の初期の混乱に関して責任があったことが、あたかも前提事実のように述べられている。

この点についても、第三者委員会の調査報告書や諸見解に対して具体的な誤りを指摘して反論しているにもかかわらず、本件見解でもこれに全く答えていない。

これまでの反論文書のやり取りをふまえば、私の責任論に関しても科学的かつ正当な根拠はなかったことがもはや結論づけられるべきである。

### 4 おわりに

私は、7月意見書で下記のとおり指摘した。

「第三者委員会の誤った報告書をよしとして、J-ADNI 1のデータをそのまま公開し、私を研究メンバーから外して、標準化もされない心理検査日本語版を用いていわゆるJ-ADNI 2研究を再開することはとうてい許されない。それは、多額の国家予算を投じた本プロジェクト、ひいては日本の科学研究に対する世界からの信頼を失う事態となり、とりかえしのつかない国家的損失をもたらすからである。安易な対応により将来に禍根を残すことがあってはならない。そのためにはJ-ADNIの問題が世界的に議論される必要もあり、それに向けた対応も行う予定である。」

本件見解を読む限り、このような私の意見の正当性はより高まっているものと判断される。第三者委員会の調査報告書がまとめられてから1年近くが経過した現時点でもJ-ADNI 1のデータは公開されておらず、J-ADNI 2の再開はされていないものと認識している。J-ADNI 2に関して、私が作成した各心理検査日本語版の使用について許諾を求めるなどの連絡が来たことは一切ないのである。

改めて、本件の諸問題に目をつぶることなく、真に日本の臨床研究の未来を考えた適切な対応がなされるべきことを意見として表明する。